

栄養学科 坂本寛先生推薦



『アルジャーノンに花束を』

キイス，ダニエル
(早川書房)

私が大学で学生生活をおくっているときに読む機会があり、IQ（知能指数）だけでなく、EQ（感情知能）をも高めることが大切なのだと考えさせられたSF小説である。

主人公のチャーリィは32歳で、知的年齢が6歳の知的障害者である。パン屋で働いており、同僚達に優しくされ楽しく暮らしていた。

一方、ストラウス博士とニーマー教授は、精神外科手術で人工的に知能をあげる研究に携わっており、アルジャーノンと名づけられた一匹のネズミの知能を飛躍的に向上させることに成功していた。ストラウス博士とニーマー教授は、チャーリィを臨床試験の被験者として選んだ。

外科手術を受けたチャーリィはネズミのアルジャーノンで実証されたように次第に知能を向上させていき、大学生と議論ができるようになっていった。チャーリィの知能は、その後も飛躍的に伸び続け、やがては、ニーマー教授の知識を凌駕するようになる。チャーリィが「最新の日本語の論文は読んだことがあるか？」とニーマー教授に当たり前のように尋ねて、教授の機嫌を損ねるという件もある。IQは高まったがEQは、元のままだったチャーリィは、社会性を持ち合わせなかったのである。自分が実験のモルモットとして扱われていることに憤りを覚える。そして、周囲の人々を蔑むようになり、人間関係を保つことができずに孤独感を募らせるようになる。

そして、ネズミのアルジャーノンの知能向上後の異変を知ることとなる。つまり、知能向上が一時的なものであり、やがてはチャーリィも元の知的年齢に戻ってしまう運命にあることを悟ってしまう。

教育というものが、知識、教養の向上だけではなく、社会性などの人格形成をも包括するのだということに気付かされた一冊であった。